

私の新婚旅行先はウクライナだった。そのためウクライナには何人か知己がいる。2月24日、ロシア軍による暴力と殺戮が始まった。ウクライナの人々が今どんな暮らしをしているのか。ニュースだけではうかがい知れない話をここに書き記そうと思う。いずれも東部の激戦地、ハリコフ在住者の話である。都心から10キロ程郊外にある村では、ロシア軍によって住民が皆殺しにされたそうだ。

30代夫婦：会社の法律部門で働いていたご主人は、地区防衛隊に志願。前線で砲弾の破片が

胸部貫通。幸い一命を取り留め退院したが、再び前線配属を志願。奥さんと子どもはポーランドに疎開中。

40代夫婦：アパートの近くで砲弾が炸裂し、破片が自宅の冷蔵庫に突き刺さった。郊外の親戚を頼って避難。

40代夫婦：奥さんと小学生の娘さんはドイツまで逃れた。だだっ広い体育館で雑魚寝。しかし砲撃の音を聞くことがないだけでも安心とのこと。ご主人は老母の介護のため、市内に残留。



医界サロン

ウクライナの人々は今

広報委員会副委員長 堀井 孝容

30代夫婦：侵攻後、直ちに友人達と連れ立って1,000km余り西へ車で避難。モルドバに避難を試みるも、60歳以下の成人男性の出国をウクライナ政府が禁止しているため断念。途中奥さんがコロナを発症。山間部の村落に一軒家を借り、高熱にうなされながら療養。ゲームプログラマーの奥さんはコロナ治癒後、海外から受注した仕事を避難先にてリモートで行っている。

60代夫婦：市内に残留。アパートに電気は日に数回しか来ないので、ボイラー技士のご主人は以前勤務していた病院で、設備係として住み込みでお世話になることに。ただし無給。看護師兼薬剤師の奥さんはご近所さんの介護。週末だけ2人とも自宅アパートに戻る。

毎日絶えることがない砲撃の中、この高齢夫婦は、なぜ国外避難しないのか。

「第一に、私達は渡航用パスポートを持っていません。今まで国から出たことがないし、言葉の通じない国に逃げるのは不安です。第二に、国外に出ると年金が支給されません。第三に、もう年だし、故郷で死にたい。ご近所の歩

けないおばあさんを一人置いて、自分達だけ逃げ出すとでも？」

ロシアに住んでいる親戚を頼って避難したら？ 軽々しく口に出したのが間違いだった。

「冗談にも限度があります。死んでもロシアになんか行きたくありません！」

人口140万人の大都市ハリコフは国境の街だ。国境まで40km、ロシア領の隣町まで80kmだ。ソ連時代は両都市の間に県境程度の境界線があるだけで、市民は自由に行き来していた。しかしソ連崩壊とともに国境線が引かれた。侵攻後、ハリコフ市民の中にはロシア在住の親戚と絶縁した人も多いという。戦争に対する認識があまりにも違いすぎるのが原因だ。

ハリコフの人々は、日常生活ではロシア語を話す。自分のことをロシア民族と名乗る人も多かった。しかし侵略ですべてが変わったようだ。

「私達はロシア民族なんかではない。『ロシア語を話すウクライナ国民』だ！」